

全油販連NEWS

令和5年第1号(R5-No.1)

2023年6月16日(金)



日本植物油協会総会披露パーティにて全油販連の音頭による油

全国油脂販売業者連合会

目 次

1. 新会長挨拶	1
2. 副会長挨拶	2
3. 日使頭祭	4
4. 地球の循環と食料サプライチェーン	5
5. 賛助会員からひとこと	9
6. 記者の視点	14
7. 東京油問屋市場第123回起業祭を開催	16
8. 各地区の活動状況	17

新会長挨拶



全国油脂販売業者連合会
会長 館野 洋一郎

昨年10月の総会において、全国油脂販売業者連合会の第21代の会長に就任いたしました、館野です。3期6年務められた宇田川前会長の後任としては甚だ力不足と存じますが、皆様のお力添えを賜りながら油脂業界の発展に尽力いたす所存ですので、宜しくお願い申し上げます。

さて、3年間続いたコロナ禍も、ワクチン接種や治療薬の認可等が進む中、本年は収束に向かいつつあるものと承知しております。

食品業界においても、国内外の旅行者が増えるなど人の動きが活発化する中で、飲食店の利用客の回復も顕著ですが、他方、新たなライフスタイルによる消費者の食の場面や嗜好の変化も定着しつつあり、飲食店のみならず、その取引先である卸・問屋、そして食品メーカーや生産者にとっても、需要のシフト・変化への対応は引き続き喫緊の課題となっており、油脂業界もその例外ではありません。

また、特に昨年は、地球温暖化による世界各地の異常気象の影響で油脂原料の生産が不安定化する中、歴史的な円安相場も相まって、油脂の価格高騰と供給不安が深刻化した歴史的な年になりました。さらに、米中対立の激化、ロシアのウクライナ侵攻といった国際情勢の変化にも起因する資源・原料高が、物流費・エネルギー費等のコスト上昇をもたらし、油脂業界各社の収益を圧迫しているものと承知しております。

このような需要と供給の状況は、その様々な背景を鑑みますと、今後数十年に亘って継続する可能性が大きいものと考えられます。私達は、大きな歴史の転換点の真只中にいるという認識を持つことが肝要と存じます。

しかしながら、そのような中であっても、油脂が国民の健康に不可欠な三大栄養素の1つであることに変わりはありません。WBCの盛り上がりの結果、野球（ベースボール）の裾野が広がるとともに、米国のメジャーリーグの価値（ブランド）が向上したように、油脂業界においても、メイド・イン・ジャパンの油脂や、これを用いた食品・料理の価値を国内外に広げ、ブランド化を図る取組を行なっていくことが、安定供給と併せ、私達の最大の使命と考えております。全油販連といたしましても、「コロナ後」においても、油脂メーカーの皆様と共に、ユーザーの皆様や消費者の方々にとって従来以上に「価値ある存在」になるべく取り組んでまいり所存ですので、御指導・御鞭撻を賜りますよう、宜しくお願い申し上げます。

結びに、油脂業界の皆様の御健勝・御多幸を心より祈念申し上げ、御挨拶とさせていただきます。

副会長挨拶

● 宇田川 公喜（㈱宇田川商店 代表取締役社長）



全油販連会員の皆様、大変ご無沙汰しております。
3期6年にわたり会長在任時には一方ならぬ御高配を賜りましてこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

さて、新型コロナウイルスも第5類に移行し、人の行動がコロナ前に戻りつつあります。私の地元、浅草でも海外からの旅行者が急増し街も賑やかさを増しております。5月には3年ぶりに三社祭が通常の規模で挙行され多くの方で賑わいました。また、7月には隅田川の花火が4年振りに再開される予定です。私共、全油販連も館野新会長のもと、“油脂未来セミナー”を再開致します。油に関する知識を改めて学ぶ場として有意義になる様な場を設けていく予定ですので会員各位の方々の奮ってのご参加を宜しくお願い致します。

私の好きな言葉は、

以和為貴（和を以て貴しと為す）です。

油を売る仲間として、同じ想いを持つ仲間として、厳しい局面では有りますが、未来へ進んで参りたいと考えます。

最後に全国油脂販売業者連合会も今年で創立70周年を迎えます。
全ての油脂業界の方々に様々な面でご協力を賜る事となるやも知れませんが！
その節はお力添えを戴けますと幸いです。
宜しくお願い致します。

● 島田 豪（島商㈱ 代表取締役社長・東京油問屋市場 理事長）



令和5年の全油販連 NEWS 発行にあたり、一言ご挨拶申し上げます。コロナ禍も終息に近づき、ようやく通常の世の中が戻って参りました。製油業界を取り巻く環境も原料相場の暴騰で厳しい状況が続きましたが、一部の原料を除いては落ち着きを取り戻しつつあり、各業界では今までの苦境を乗り越え、明るい兆しを感じつつあります。コロナ禍でも各製油メーカーでの新商品開発や営業推進は続いており、今後より精力的にいろいろな活動を行なっていきたく会社や油業界共々考えております。私は東京・日本橋で油問屋を営んでおります島商株式会社の島田豪と申します。グループ会社である化学品の卸売業の東部ケミカル株式会社は双子の弟・島田壮が社長を務めております。いかんせん顔が大変似ているため、間違えて声をかけられることも多く、素っ気ない対応をすることもありますがご容赦願います。39歳の時に父からバトンを受け、油専門問屋であり続けることをモットーに活動しております。しかし昨今、どこからでも油を購入することができる時代です。ですから私たち油業界ではより付加価値を付けて、いかに信頼の置ける会社から購入いただけるようにするか、または伝統的な油脂だけでなく、より革新的な油を提案することの仕組み作りが必要だと感じております。さらに我々の強みは、新商品の情報をいち早くユーザー様にお届けできることです。また世界情勢などから相場状況を先読みし、最新の情報を速やかに伝える力もあります。油脂販売業者として上記に挙げましたやるべきことをやり、邁進してゆきたいと思っております。今後とも全油販連の活動に対しましてご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。

● 木村 顕治（株式会社マルキチ 代表取締役社長・関西油脂連合会 会長）



コロナ禍もようやく落ち着きを見せ、街には平常が戻ってきつつあります。夜の心齋橋を久しぶりに歩いてみると大勢の観光客に驚きます。そのほとんどは外国人でした。コロナ前のように外国人が観光地を埋め尽くす日々が戻り関西も活気づくことを期待させられます。

巣ごもり生活が定着してしまい、街は変貌するのではと恐れられていました。特に外食産業には人が戻ることはないのではと心配されていました。しかしそれは杞憂であったようで、会って話したいという人間の本性はこんな事では変わることはなく外食産業にも人があふれる日々が戻ってこようとしています。

しかし、コロナ禍を機に人材不足は深刻化しています。物流に関する諸問題や劣後ローン、奨学金の代理返還制度など新たな経営課題もコロナ禍の終息とともに取りざたされはじめています。次々と現れる災害や様々な外部環境の変化に備えることの大切さを思い知らされます。

脅威、変化を予測して完全に備えることはできませんが、それぞれの企業が備え、業界のネットワークや繋がりを強固にして連携することがリスクを減らしチャンスをつかむ力を何倍にも高めると考えます。

多くのモノを失ったコロナ禍ではありますが、私たちはリモートコミュニケーションという新しい手段を得ました。同時にリアルでの対面会話で関係を深めることの重要性も再確認しました。中央から離れていてなかなかコミュニケーションが取りにくい関西油脂連合会もリモートの活用で距離を縮めることができます。新しい仕組みも使いながら全国の一体感を醸成し、未来に向けて一丸となる体制を作り会員企業と業界の発展のお手伝いをさせていただきたいと思っています。

● 佐橋 徳洋（株徳万商事 代表取締役社長・愛知県油脂卸協同組合 理事長）



愛知県油脂卸協同組合令和4年度通常総会にて新理事長（代表理事）に就任しました、株徳万商事の佐橋で御座います。（第11代）宜しく願い致します。

皆様の御理解があつてこそ、無事理事長に御指名を受ける事ができました。深く感謝し、油脂販売業者と組合の健全な運営に情熱をもって尽力する覚悟であります。

増す益す責任は、重大であり、お役目を引き受けた以上、歴史と伝統にあふれた油問屋の集まりである全国油脂販売業者連合会の発展に微力では御座いますが、鋭意努力し精一杯務めさせて戴きます。そのためにも、諸先輩の足跡を大切にし、油を愛し、油を大事に売るといふ姿勢を貫き、生活に欠かせない油脂販売の供給者として安定的な供給に努め、社会に貢献し、社会的責任を果たして行き、会員相互がフェアな競争を行いつつ、一致団結して業界の健全な発展を推進していかなければならないと考えます。

（座右の銘）

- ・幸田露伴の「物事は、或は、仕事は、道理に従って心を尽くして行けば、面倒な事は、何も無い。」「幸せとは、夢を叶える事で、所有する事では無い。」
 - ・二宮尊徳の「道徳なき経済は、罪悪であり、経済なき道徳は寝言である。」
- 「すべては現場から。」

仕事を進めて行く上で、心の支えにしております。

最後に、皆様方の益々の御発展と御健勝を祈念させて頂き、今後とも倍旧の御支援御鞭撻を賜ります様、お願い申し上げ挨拶とさせて頂きます。

日使頭祭

令和5年4月8日(土)

4月8日(土)、京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において春の大祭である日使頭祭が開催され、メーカー、業界団体、問屋、問屋団体、業界紙誌関係者70余名が参加した。また、総代会、地元関係者も多数出席し、油脂業界の発展と繁栄、更には無事息災を祈願した。過去3年間はコロナ禍の中で規模を縮小し、参拝は個人として行なっていたので、団体参拝は4年ぶりとなった。神事においては、まだコロナ禍が収束した訳ではないことを鑑み、恒例の式神楽、湯立神事は行なわれなかった。



日使頭の新妻会長



津田定明宮司

本年の日使頭(ひのかしら)は一般社団法人日本植物油協会の新妻一彦会長(昭和産業(株)代表取締役会長)が務められ、神事の後の挨拶では「油祖離宮八幡宮は、わが国の油脂産業の基礎を築いた栄光が多くの人に語り継がれている。この地に立って改めて悠久の歴史を感じた。」「かつて灯明として使われていたエゴマ油は、現在は健康油として注目されており、多種多様な植物油がその機能などで脚光を浴びている。植物油という国民の命と健康を守る価値のある商品を取り扱っているという使命を改めて認識し、全うするため、直面する課題に立ち向かっていくことを誓う。」と述べた。この後、津田定明宮司の挨拶に続き、津田定豊禰宜がソイオイルマスターの資格を取得した報告があった。



メーカー各社より奉納された植物油

今年はコロナの影響を鑑み、直会、模擬店は行われなかったが「大山崎えごまクラブ」による立木式搾油機でのエゴマ油絞りや、地元「つくどん」による和太鼓演奏奉納が行なわれ、多くの参拝者で賑わった。

(写真提供 油脂特報社)

地球の循環と食料サプライチェーン

油糧輸出入協議会
専務理事 塩見 聡

地球の持続性に影響を与えている温室効果ガスに加えて自然が失われてきた事による負の影響については COP15 として取り上げられ食料サプライチェーンが依存している自然と直接関係していることも認識されてきています。自然の状態を農地・農園などに転換させる事により元々存在していた生物多様性を喪失することは地球の循環に影響を与えているという理解が進み食料ならびに油糧種子、油脂の生産とも強く関係していることから以下の通り整理した。

1. 国連による気候変動に関する条約(COP26)と生物多様性に関する条約(COP15)

農地開拓のため元々の自然の状態を変更した場合に起こる生物多様性の喪失が地球の循環システムに影響を及ぼすと認識されており、今後 10 年の地球における社会環境面でのインパクトの深刻度においてはこの生物多様性の喪失が 3 位に浮上してきています（以下テーブル）。

国連では COP26 とは異なるアプローチとして COP15 生物多様性保全のための対策などの議論が展開されてきていますが、食料サプライチェーンに非常に関係深いスコープとなります。因み生態系の破壊は世界の国内総生産（GDP）総額の約半分にあたり 44 兆ドルに影響をもたらすとの試算もありそのインパクト大きさがうかがえる。

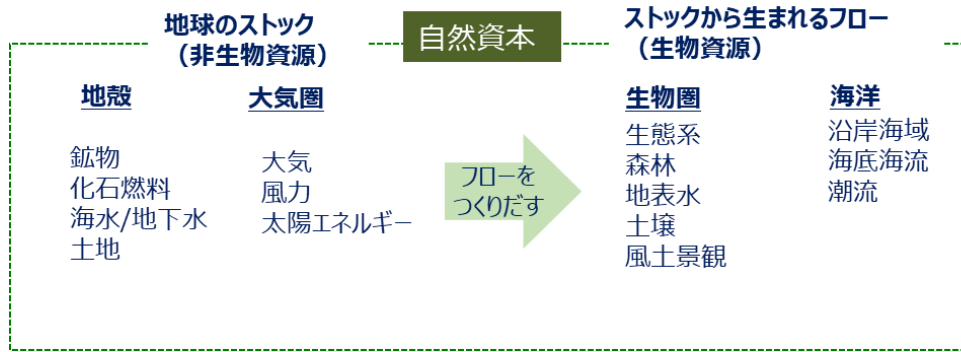
食料サプライチェーンに携わるそのステークホルダーはこれら認識を高める必要があり、また温室効果ガスに関する排出量の開示(TCFD：気候関連財務情報開示タスクフォース)に加え生物多様性に関する情報についても認識を高める必要がある。開示方法については国連傘下の分科会にて検討されておりそのフレームワークが今年末までに作成される見通し(TNFD：自然関連財務情報開示タスクフォース)。

有識者は生物多様性リスクを重視	
1位	気候変動への対応の失敗
2位	異常気象
3位	生物多様性の喪失
4位	社会的結束の侵食
5位	生活破綻（生活苦）
6位	感染症の広がり
7位	人為的な環境災害
8位	天然資源危機
9位	債務危機
10位	地経学的対立

(注) 有識者がみる今後10年の深刻度
(出所) WEFグローバルリスク報告書

2. 地球の「ストック」と「フロー」

自然に注目するうえで、地球上で起きている循環の状態は自然に依存していることも踏まえ「自然資本」ととらえる。



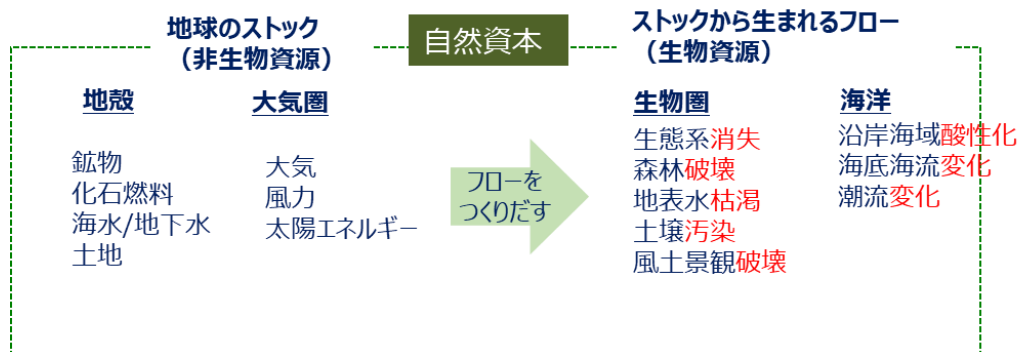
(1) 地球の誕生 ～ ストックの形成

地球が誕生した際に非生物資源（鉱物）から形成される（46 億年前）

(2) 生命の誕生 ～ フローの形成

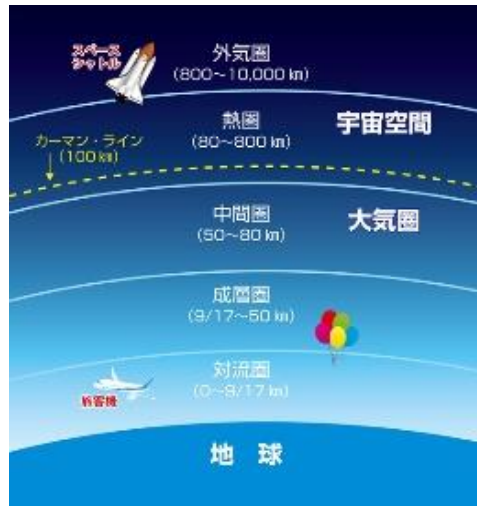
生命が海のなかで誕生してその後光合成に酸素がオゾン層となり生物が上陸するして生物資源が形成（36 億年前）

自然資本の状態のバランスが崩れると地球の循環に負の影響を与え、地球温暖化と併せて地球の持続性に懸念がでてしまっていると考えられています。以下赤字は生物資源において負の影響がでている状態



3. 地球の循環と限界

(1) 地球の循環は大気圏の内側



地球の自然現象や太陽による熱の移動は大気循環や水循環を通じて宇宙空間とやりとりすることでバランスを保っている。人類が持続的に存続するためには、地球上の「循環」システムの中に行動の範囲を収め大気圏、生物圏、海洋圏と相互の関係を崩さないようにする必要がある。

産業革命後の温室効果ガスと食料確保のため自然破壊により生物資源に影響がでてきている事実が科学的に確認されている。

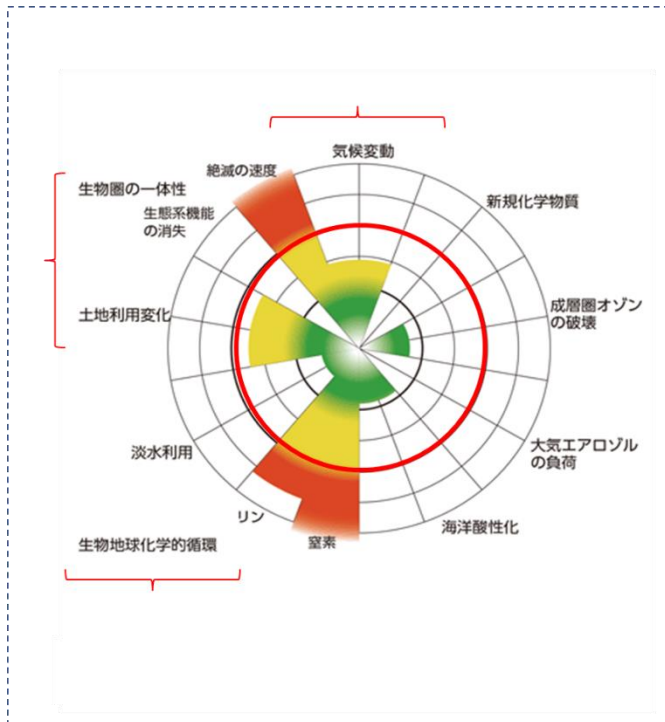
(2) 地球の限界（プラネタリーバウンダリー）

地球の状態に限界が来ていると指摘しているのが欧州（スウェーデン）にて提唱されているプラネタリーバウンダリーとなる。

地球へ負荷をあたえている4の要素と9のインパクトについて以下の通り特定している↓

地球へ負荷を与えている要素		インパクト
A	温室効果ガス排出	①気候変動 ②海洋酸性化 ③オゾン層の破壊
B	水の消費、化学肥料	④生物地球化学的循環 ⑤淡水の状況
C	土地利用の変更	⑥土地の状態の変化 ⑦生態系の消失
D	大気、水質汚染	⑧大気エアロゾルの負荷 ⑨化学物質による汚染

食料サプライチェーン（食料の生産）という意味では B と C が特に関係しており一方安全領域となるバウンダリーを超えてしまっている状況は認識する必要がある
↓



4. 将来に亘り持続性ある食料（油糧種子、油脂）サプライチェーンのために

- (1) サプライチェーン全体のなかで、生物多様性の喪失が地球環境へのインパクトが高い要素であるということを認識するタイミングにきている、
- (2) プラネタリーバウンダリーにおいて、温室効果ガスによる気候変動、施肥による生物地球化学的循環への影響、農地のための土地開発に関し理解をサプライチェーン全体（消費者含む）で高めていく必要がある、
- (3) 食料原料についての安全保障は産地で直面している課題に対して解決できる様施策について長期的視点で検討（スタディー）することが肝要、

農林水産省が掲げる「みどりの食料システム戦略」等によるイノベーションによる持続的生産体制の構築をめざしている。日本の技術を海外生産地に活用することで環境インパクトを減らしたり生産性を高めることで生産国と新しい信頼関係を構築する必要がある。

《 賛助会員からひとこと 》

各メーカー様に順次原料情報あるいはトピックスをいただき、シリーズとして掲載しています。今回は、九鬼産業㈱様に「国産ごま栽培への取り組みについて」、岡村製油㈱様に「『綿実油』原料の世界動向について」と題し御寄稿いただきました。

国産ごま栽培への取り組みについて

九鬼産業株式会社
東京支店長 三宅耕二

●三重県産ごま栽培への取り組みについて

九鬼産業株式会社は明治 19 年に三重県四日市市にて製油業を起業、当時四日市周辺では菜種の栽培が盛んであり、その菜種を用い菜種油の製造所として設立されました。

設立当時には日本資本主義の父と称される渋沢栄一氏の助力も得ていたとの記録も残っております。

現在も四日市にて、創業時と変わらぬ伝統製法でごま油の製造を行っております。ごま油製品のほかにも、いりごま、すりごま等の食品ごまやペースト状のネリ胡麻、ごま塩、黒ごまラテなどのごま加工品と胡麻の総合メーカーとして様々な商品の製造販売を行っております。

三重県四日市に本社事務所、本社工場、三重県菰野町にネりごま、ごま加工品を製造する竹成工場（余談ですが、先日のカタールで開催されたサッカーワールドカップで日本代表として大活躍を遂げた、浅野琢磨選手は菰野町の出身です。）と全国 4 つの支店・営業所（東京・名古屋・大阪・福岡）を拠点としております。



国内で流通する 99.9%が海外産であるごまですが、国産ごまの需要は高い中、国産ごま原料が慢性的に不足している現状です。この状況を打破するべく、弊社では 2014 年から、三重県産ごまの栽培普及の活動に取り組んでおります。福祉事業所（障がい者施設）との農福連携による栽培推進や県内の農家の方々に協力仰ぎ、栽培面積の拡大を進めてまいりました。こうした取り組みにより 2015 年 11 月「三重県ごま栽培プロジェクト」が『フード・アクション・ニッポン アワード 2015』食文化・普及啓発部門（地域の食文化の活用や保護・継承を図る活動、国産農林水産物の消費拡大につながる普及啓発の活動）で三重県下初となる優秀賞を受賞しました。

それ以降も更なる普及を広げるため、栽培者への栽培研修会の開催や新規栽培者の掘り起こしを進めております。定期的な現地巡回や自社管理ほ場にて栽培試験を行い、栽培技術、知見を増やし、栽培現場へのフィードバックなどの活動を継続的に実施しており 2021 年には栽培者 52 件、栽培面積は 18.9ha まで拡大し、統計上では鹿児島県に次いで全国第 2 位の産地にまで拡大しています。

これらの活動が農林水産省の全国表彰事業である「第 9 回ディスカバー農山漁村の宝」において、「国産ごま取り扱い日本一への挑戦！」と題した取組みが東海農政局より「ビジネス・イノベーション部門」に選定され 2022 年 12 月に表彰式が執り行われました。



ごまの栽培は手作業体系が殆どです。かつては日本国内でも各地で栽培されていたそうですが、手間が掛る作物として敬遠され、徐々に栽培が衰退していきました。

日本でのごまの栽培適期は初夏～初秋に掛けてとなりますが、梅雨の長雨、冷夏、秋雨の影響により、生育が不良となることがあります。最盛期には背丈が 2m 近くにもなるごまは風にも弱く、収穫間際に台風に襲われ、1 夜にして畑が全滅することも珍しいことではありません。

栽培されている量が少ないために、栽培時に使用できる除草剤や殺虫剤もほとんど登録がされておらず、このことも日本国内のごま栽培が衰退した原因の一つと思われます。

当社は国産ごま普及に向けて、三重県、国立研究開発法人 農業・食品産業技術総合研究機構、井関農機(株)、地元三重の農家様と設立されたコンソーシアムに参加し、生業としてごま栽培を成り立たせるために機械化を含めた栽培法の確立、適した品種の選抜、農薬登録への取り組み等進めてまいりました。

これらの取り組みが評価され、この度前述の「第9回ディスカバー農山漁村の宝」東海農政局より「ビジネス・イノベーション部門」に選定、表彰を受けることができました。

まだまだ収穫できる量は少なく、輸入品に頼らざるを得ない現状ですが、少しずつでもごま栽培面積を増やし、将来的には三重県産ごまを謳った商品を世に送り出せることを目標に継続した取り組みとしていきたいと考えております。

「綿実油」原料の世界動向について

岡村製油株式会社

取締役東京支店長 朝倉 俊洋

日本国内の植物油需要はコロナ禍の影響もあり、ここ 2.3 年は 2,400~2,500kt/年で推移しコロナ禍以前の 2,700kt/年の 90%内外に留まっている。この需要の中には「パーム油」「オリーブ油」等の輸入油が含まれておりその比率は 40%となっており国内需要における国内搾油比率は 60%でジリジリ減少しているのが現状である。

2020 年半ば以降植物油糧種子全般において価格高騰が始まり、「菜種油」原料ではその価格が 2022 年春には 2020 年初比で 2.5 倍にまで暴騰した。(大豆油原料も 1.9 倍まで) 現在は多少の落ち着きも見られるが「菜種」「大豆」とも 2020 年初比で 1.6-1.7 倍となっており原料高は依然継続している。

これらの情報は新聞及び Net で取り上げられ理解され易い所ではあるが、当社で搾油販売している「綿実油」原料である「綿実」については、「菜種」「大豆」とは違い相場もたっていないこともありその情報は乏しいものになっている。そこで、この場を借りて「綿実油原料(綿実)」の 2023 年現状と見通しについて述べさせていただきご理解を賜ればと思います。

「綿実」の産地は当然ながら「綿花」栽培をしている地域(国)となり、全世界で 41,000~42,000kt/年の生産となっている。この中で、北半球のインド・中国の 2 国が 50%強を占めている。残念ながら我が国において「食用」としてはこの 2 国からの輸入が出来ない状況が続いている。(遺伝子組み換え品種の未承認等)そこで、当社が輸入・使用出来る地域としては北半球では米国・トルコ・EU、南半球ではブラジル・豪州・アルゼンチンとなりその情報(生産量並びに作柄等)収集に努めるとともに購買担当者が定期的に現地へ赴き現状把握をし当社が安定した品質で安定生産出来るような買い付けを行っている。

北半球の 22/23 クロップ品は昨年(2022 年)9-11 月収穫されたものでインド・中国を除くと最大産地の米国は作付面積の 50%以上を占めるテキサス州の大旱魃により全米圃場放棄率は過去最大となり当初 5,000kt 以上が期待された生産量が 4,000kt を割り込む事態となった。(21/22 クロップ比でも約 80%▲20%) この大旱魃が明確になった 2022 年 8 月にはその価格は一段高となり継続している。23/24 クロップ(播種 2023 年 4 月以降)に期待したいところであるが「綿花相場の下落」「大旱魃の悪夢」がどう影響するかを注目している。因みに、消費地である米国内での「綿実油」価格は 2020 年秋時点では約\$1100/t であったものが 2022 年春には約\$2700 となり 2.5 倍まで跳ね上がった。2022 年末では多少の落ち着きを見せてはいるが約\$2350 で 2020 年秋比 2.2 倍となっている。(一方「菜種」は約\$1000/2020 年秋が約\$2400/2022 年春となりや

はり 2.5 倍まで跳ね上がったが、2022 年末には「菜種相場」の下落もあり約\$1650 となり 1.7 倍と落ち着きを見せ始めている。）

南半球は最大産地であるブラジルが 19/20 クロップ(2020 年 5-8 月収穫)4500kt 超の生産量が翌 20/21 クロップでは▲1,000kt の減産となり価格高騰が始まった。この減産はその他少しでも利益の出る穀物(大豆・コーン)の作付面積増やした為「綿花作付け面積」の減少によるものでその傾向は 21/22 クロップ(2022 年 5-8 月収穫)及び 22/23 クロップ(2023 年 5-8 月収穫予定)も継続している。故に価格も高値で張付いている。

それを補っているのが豪州(オーストラリア)でここ 2 年豊作で 22/23 クロップも豊作見込みとなっている。生産量増で価格軟化しても良さそうなものであるが輸出需要(特に中国)が旺盛なことと他国(米国・ブラジル)産綿実価格が高いことから高値圏で推移している。豪州産は他国産に比べて低油分(▲1-2%)の為搾油業者にとっては頭の痛い所である。

上述の通り、「綿実油原料である綿実」は汎用油原料が落ち着きを取り戻しているのとは違い世界的にみてここ 1-2 年は高値圏価格を覚悟せざるを得ない状況となっている。当社としては、国内に「綿実油が欲しい」と言って下さるお客様がおられる限り国内搾油に拘りを持ち品質確保並びに安定供給のための努力を継続していく所存です。 お客様にはご理解を頂けるようにこれまで以上に説明をさせて頂きますので引き続きご愛顧を頂けますようお願い申し上げます。

最後に、世界経済を不安定化させている「コロナ」「ウクライナ侵攻」が 1 日も早く終結することを心から祈願致します。



記者の視点

毎回、業界紙誌の皆様からのいろいろな視点で楽しい記事を御寄稿いただいています。今回は日刊経済通信社 川田記者から御寄稿いただきました。

料飲店のオペレーションは内と外で難しい～実体験から～

日刊経済通信社

記者 川田 岳郎

2020年末、年を越せない食材などもあるから、忘年会をやるのでぜひお越しくださいとの連絡が、とある居酒屋の女将さんからあった。連絡を受けた時点では、年末の予定はわからなかったし、もともと断ろうとは思っていたのだが、お断りの連絡を入れる前に友人から、「あのお誘い断ったほうがいいよ」との連絡があった。理由を聞くと、友人は逡巡しながら、「女将さんから『岳郎（私の名前）が来るのはイヤだなあ』との誤送信であるだろう LINE が来た」との話をしてくれた。私のことを知るお店の関係者に送る LINE だったのだろう。女将さんが私のことをどのように思うのかはコントロールできないところだから、イヤだと思えるのは仕方ない。その話を聞いた直後に、「年末の日程がわからないから、今回、忘年会はご遠慮します」との LINE を女将さんに送ったのだが、自分でも誤送信に気づいたのだろう、既読になったのは年が明けてしばらく経ってからだった。

お店が客を選ぶことは難しいし、ときには相性が悪いこともあるだろう。なにか粗相をしたとか、声を荒らげることがあったのなら嫌われても当然と思えるのだが、とりたてて思い当たることもなく、「コロナで厳しいからお店のことを応援してほしい」と言われていたので、営業しているときには、時間をみつけてお伺いしたこともあったのだが……

今となっては、嫌われる理由もわからないが、このようなことがあった場合、二度とそのお店には行かなくなるということは、実体験としてもはっきりとわかった。実は、そのお店の近くにある会社の方にも、お店を紹介しようと思っていたのだが、それもやめておこうとなるし、ほかの人におすすめのお店を聞かれても、そのお店を紹介することはないだろう。さらに、このエピソードを話した友人からは、「どこのお店？」と聞かれ、「だったら、自分も行かない」となってしまう。

先日出た会で、「プライスに見合った価値を提供できなければ、お客さんは二度とそのお店に行かない。外食産業は、チャンスとリスクの狭間で仕事をしている」とおっしゃる方がおり、3年前のエピソードを思い出した。価値とは、「おいしさ」だけではなく、その場の雰囲気や会話、さらには店員さんの態度や姿勢など、さまざまな事柄が含まれている。今回は、食事をしているその場ではなく、全く関係ない場所で起こった出来事であるにもかかわらず、そのお店に対する印象は180°変わってしまった。

また、別の記者会見では、あるメーカーの社長が「新型コロナで飲食店が休業を余儀なくされるなか、ファストフード、ホテル、懐石やフレンチなど専門性の高いレストランなどあらゆる業態で、従業員が辞めていった。さあ、いざ再開となっても、専門性の高さが求められる分野ほど人が集まらない状況になっている。この状況こそ、ニューノーマルだと言わざるを得ない」とおっしゃっていた。

専門性の高い接客ができる人材が少なくなれば、お店から客へのきめ細やかなおもてなしも難しくなるし、ましてや、客側からのお店への過度な要求は言語道断ともいえる。一方で、客がお店を育て、お店が客を育てという好循環を生み出せれば、お互いに力を与え続ける永久機関のように通い続けたい場所となるだろう。

私一人が行かなくなったからといって潰れるようなお店でもないし、そのお店でできたつながりなどもない状態だったので、とりたてて困ることもなく過ごせてはいるが、できたと縁がなくなるというのは、理由はどうあれ、さびしいものではあると思った次第だった。



東京油問屋市場 第123回起業祭を開催

と き 令和5年3月24日（金）17：00～18：30
ところ ロイヤルパークホテル（東京・中央区）

東京油問屋市場は4年ぶりに起業祭を開催した。式典では、島田 豪理事長の式辞朗読に続いて、喜田正道情報委員長が、市場の今後の更なる発展を祈念し、盛大に油メを行なった。

引き続き宇田川公喜副理事長が、式辞の内容に関して、万治3年（1660年）に設けられた江戸油仲間寄合所や元禄7年（1694年）に結成された『江戸十組問屋』にまで遡る、開所363年の市場の歴史の一端を披露するなど、式典の趣旨を分かりやすく解説した。

その後の懇親会では、始めに島田理事長が「冒頭に式辞を朗読させていただき、その中で歴史を非常に深く感じた。私の祖父が七代目、十代目の理事長を、私の父が二十代目の理事長をさせていただいたり、この灯は消せないと思ったのはもちろんのこと、次にバトンタッチしなければならぬという重みも感じた」「メーカー様に良い油を作っていただき、それを私たちの努力で販売し、少しでも日本経済の発展に貢献できれば幸いである」と挨拶した。また、来賓を代表して一般社団法人日本植物油協会の新妻一彦会長（昭和産業㈱社長）から「植物油は健康維持に不可欠であり、重要なエネルギー源として機能、風味、おいしさが評価され食生活に定着している。油脂製品の価値を再認識し、消費者に油脂製品の新たな価値を提供し続けていく」と御挨拶を賜った。

その後、全油販連 館野洋一郎会長が「われわれ油問屋は、卸の団体・企業として世の中に油を広げる、油脂の価値を広げる、日本の油脂を使った良い商品をもっと世の中に知っていただくということを皆様と一緒に取り組んでいきたいと思っている」と乾杯の挨拶を行ない、立食パーティの和やかな懇親の後、最後は穴水健治副理事長が油メで締め括った。

（写真提供 油脂特報社）



式典の様子



油メ



島田理事長 挨拶



日油協新妻会長 来賓ご挨拶



全油販連館野会長 乾杯



穴水副理事長 油メ

各地区の活動状況

＜令和3年2月～令和5年5月＞

※前号の続きから簡潔に掲載します

令和3年

- 3月18日(木) 東京油問屋市場はオンラインで情報委員会を行ない、日清オイリオグループ(株)より「原料事情」について資料を基に説明を受け、活発な情報交換を行なった。
- 3月25日(木) 東京油問屋市場は第120回・121回起業祭を昨年度に続き本年度も延期とした。
- 4月3日(土) 京都・大山崎の油祖離宮八幡宮にて恒例の『日使頭祭』が举行されたが、昨年続き規模を大幅に縮小して行なわれた。
- 4月20日(火) 東京油問屋市場はオンラインで情報委員会を行ない、昭和産業(株)より「原料事情」について資料を基に説明を受け活発な情報交換を行なった。
- 5月20日(木) 東京油問屋市場はオンラインにて情報委員会を行ない、岡村製油(株)より「最近の綿実事情」について説明を受け、活発な情報交換を行なった。
- 5月21日(金) 関西油脂連合会は第18回定時総会を書面で表決を行なった。役員改選はコロナ禍により昨年に引き続き1年間継続することとなった。
- 5月26日(水) 愛知県油脂卸協同組合は令和3年度通常総会を開催した。
- 6月21日(月) 東京油問屋市場は第121回定時総会を Web 会議システムを用いて開催した。
- 9月28日(火) 東京油問屋市場情報委員会は(株)Jーオイルミルズの「油脂事情説明会」をオンラインで開催するにあたり、全油販連会員にも呼びかけ、全国より多数が参加した。
- 9月28日(火) 全油販連役員会を書面にて行ない、第68回定時総会について表決した。
- 10月20日(水) 全油販連は第68回定時総会をロイヤルパークホテルにて Web 会議システムを用いて開催した。
- 10月29日(金) 一般社団法人日本植物油協会主催の『第29回植物油栄養懇話会』がライブ配信にて開催された。
- 11月16日(火) 『第45回日加菜種協議』が Web 会議で開催された。

1 1月18日(木) アメリカ大豆輸出協会主催の『米国大豆バイヤーズアウトトラック会議2021』がオンラインで開催された。

1 2月9日(木)・14日(火)・22日(水)

全油販連 宇田川会長、金田(雅)副会長ならびに東京油問屋市場 館野理事長、島田副理事長は、日本植物油協会、製油メーカー大手3社に年末の挨拶回りを行なった。

令和4年

1月6日(木) 関西地区の『2022年油脂関連業者賀礼会』がコロナ対策を講じながら2年ぶりにホテル日航大阪で開催された。関西を中心とした油脂メーカー、問屋関係者など約140名が参集し、関西油脂連合会の木村治愛名誉会長が乾杯の音頭をとった。

1月7日(金) 東京油問屋市場は『令和4年初立会』をオンラインにて開催し約50名が参加した。

1月16日(日) 関西油脂連合会は油祖離宮八幡宮への初詣を行なった。

1月20日(木) 東京油問屋市場は新春恒例の佃島住吉神社への初詣を、正副理事長のみで参拝した。

3月25日(金) 東京油問屋市場は第120回・121回・122回起業祭を昨年度に続き本年も延期とした。

4月9日(土) 京都・大山崎の油祖離宮八幡宮にて恒例の『日使頭祭』が举行されたが、昨年続き規模を大幅に縮小して行なわれた。

5月10日(火) 関西油脂連合会は第19回定時総会を開催した。任期満了に伴う役員改選で、木村治会長(株マルキチ社長)、中川雅弘副会長(株中川油脂社長)が再任した。コロナ対策を講じながら3年ぶりに着席で懇親会を行なった。

5月20日(金) 愛知油脂卸協同組合は令和4年度通常総会を開催した。任期満了に伴う役員改選で、新理事長に佐橋徳洋氏(株徳万商事社長)が選任され、長谷川徹副理事長(名古屋油糧株社長)が再任した。

6月27日(月) 東京油問屋市場は第122回定時総会を開催した。任期満了に伴う役員改選で、新理事長に島田豪氏(島商株社長)、新副理事長に館野洋一郎氏(株タテノコーポレーション社長)、穴水健治氏(穴水株社長)が選任され、宇田川公喜副理事長(株宇田川商店社長)が再任した。

7月6日(水)・20日(水)

全油販連 宇田川会長と東京油問屋市場 島田新理事長、館野新副理事長、穴水新副理事長は、農林水産省、日本植物油協会、製油メーカー大手3社に新役員の挨拶回りを行なった。

9月12日(月) 全油販連役員会を行ない、第69回定時総会および講演・講話会・懇親会について協議した。

10月16日(日) 関西油脂連合会はコロナ禍により取り止めていたゴルフ懇親会を開催し会員賛助会員15名の参加で盛会となった。

10月26日(水) 全油販連は第69回定時総会をロイヤルパークホテルにて開催した。任期満了に伴う役員改選で、新会長に館野洋一郎氏(株タテノコーポレーション社長)、新副会長に宇田川公喜氏(株宇田川商店社長)、島田豪氏(島商(株)社長、東京油問屋市場理事長)、佐橋徳洋氏(株徳万商事社長、愛知県油脂卸協同組合理事長)選任され、木村顕治副会長(株マルキチ社長、関西油脂連合会会長)が再任した。



館野新会長の挨拶

総会後はコロナ対策を十分に行なった上で、3年ぶりに講演会・講話および懇親会を開催した。講演会ではBCP策定アドバイザー 高荷智也氏が「攻める事業継続計画のアイデアとポイント ～BCPをコストから投資にするための考え方と事例～」をテーマに、講話では農林水産省大臣官房新事業・食品産業部食品製造課 渡邊顕太郎課長が「食用油をとりまく最近の情勢について」をテーマにお話しいただいた。その後の懇親会はコロナ対策を考慮し着席にて行ない、来賓、賛助会員、会員約60名の参加で盛会となった。



講師 高荷智也氏



講演会



農水渡邊課長 講話



懇親会

10月27日(木) 東京油問屋市場は全油販連と共催で、3年ぶりに第37回油脂製販懇親ゴルフ会(YSG会)を東京ゴルフ倶楽部で開催した。

10月28日(金) 一般社団法人日本植物油協会主催の『第30回植物油栄養懇話会』が今年もライブ配信で開催された。

- 1 1月11日(金) 愛知県油脂卸協同組合は令和4年永年勤続優良従業員表彰式並びに経営講演会を開催した。
- 1 1月15日(火) アメリカ大豆輸出協会主催の『米国大豆バイヤーズアウトロク会議2022』が3年ぶりに対面で開催された。
- 1 1月24日(木) 『第46回日加菜種協議』が3年ぶりに対面で開催され、今年はレセプションも行なわれた。
- 1 2月16日(金) 東京油問屋市場は3年ぶりとなる『大納会』をT-CATホールにて開催した。来賓、賛助会員、営業人等74名の参加で盛会となった。
- 1 2月26日(月)・27日(火)
全油販連 館野会長、宇田川副会長、佐橋副会長ならびに東京油問屋市場 島田理事長、穴水副理事長は、日本植物油協会、製油メーカー大手3社に年末の挨拶回りを行なった。

令和5年

- 1 1月5日(木) 油脂6団体共催の『第61回油脂業界新年交礼会』が3年ぶりにロイヤルパークホテルにて開催された。農林水産省をはじめとする関係官庁、関連団体メーカー、問屋、商社から450名余名が参集し油脂業界の新たな飛躍を誓い合った。最後は全油販連 館野会長をはじめとする全油販連一同で油メを行なった。



全油販連一同の音頭による油メ

- 1 1月6日(金) 関西地区の『2023年油脂関連業者賀礼会』がホテル日航大阪で開催された。関西を中心とした油脂メーカー、問屋関係者など役150が参集し、関西油脂連合会の木村顕治会長が乾杯の音頭をとった。
- 1 1月10日(火) 東京油問屋市場は『令和5年初立会』をロイヤルパークホテルにてコロナ対策を考慮し着席にて開催した。伝統行事である立会いでは、過去最高値を記録した昭和49年12月当時を再現した。来賓、賛助会員、営業人など約70名の参加を得て盛会となった。



島田理事長挨拶



農水 渡邊課長
年頭祝辞



日油協 新妻会長
年頭祝辞



全油販連 館野会長
乾杯音頭



立会い再現

1月23日(月) 愛知県油脂卸協同組合は『令和5年新年会』をホテルサンルートプラザ名古屋にて開催した。来賓、賛助会員、組合員など多数の参加を得て盛会となった。



愛知県油脂卸(協)油メ

1月15日(日) 関西油脂連合会は油祖離宮八幡宮に恒例の初詣を行ない、世界の平和と業界の発展、各社の繁栄を祈願した。

1月30日(月) 東京油問屋市場は新春吉例の佃島住吉神社に初詣を行ない油脂製販関係者46名が参拝した。その後浅草にて製販懇談・懇親会を開催し、20名の参加で製販の和やかな懇親の場となった。

3月24日(金) 東京油問屋市場は『第123回起業祭』をロイヤルパークホテルで開催した。起業祭の開催は4年ぶりとなり、来賓、賛助会員、営業人等83名の参加で盛会となった。(詳細・写真別掲)

4月7日(金) 東京油問屋市場は油祖離宮八幡宮日使頭祭前夜祭を京都・和泉屋町にて開催し、製販の有志22名が集い懇親を深めた。

4月8日(土) 京都・大山崎の油祖離宮八幡宮において恒例の『日使頭祭』が開催された。団体参拝は4年ぶりとなり、日使頭の一般社団法人日本植物油協会 新妻一彦会長をはじめとする油脂業界製販関係各社および業界団体の代表者等70余名、総代会、地元関係者も多数出席し油脂業界のさらなる繁栄を祈願した。(詳細・写真別掲)

5月11日(木) 関西油脂連合会は第20回定時総会をホテル日航大阪にて開催した。総会后、懇親会が開催され製販関係者約40名が参加し盛会となった。

5月17日(水) 東京油問屋市場は情報委員会主催懇親ゴルフ会を千葉カントリー倶楽部梅郷コースにて4年ぶりに開催した。賛助会員、営業人22名の参加で盛会となった。

5月17日(水) 日本マーガリン工業会の2023年度定時総会が大手町・LEVEL XXIにて開催され、懇親パーティが4年ぶりに行なわれた。

5月23日(火) 一般社団法人日本植物油協会の令和5年度通常総会が経団連会館にて開催され、総会後の懇親パーティが4年ぶりに行なわれた。全油販連の役員多数が出席し、全油販連一同の音頭による油メで中締めを行なった。

5月29日(月) 愛知県油脂卸協同組合は令和5年度通常総会をサイプレイスホテル名古屋駅前にて開催した。総会後の懇親会を4年ぶりに行ない来賓、組合員、賛助会員約30名が参加し盛会となった。

(写真提供 油脂特報社)

全油販連NEWS 令和5年第1号 (非売品)

発行 全国油脂販売業者連合会

〒103-0014

東京都中央区日本橋蛸殻町1-38-12

TEL 03-3666-4356

FAX 03-3666-4399

発行人 館野 洋一郎

編集人 松山 麻友美